

## 第1部（成果報告）の感想

・漠然と抱いていた障がい者へのイメージが数値化されることで社会の中での障がい者の捉えられ方が良く分かった。これを踏まえた上でダイバーシティ推進やパラスポーツ推進に取り組みればより良いものが産み出せるのではないかと。

・国内外の関心が集まるパラリンピックにおいて、人々の意識にどのような変化があるのかという非常に興味深い調査であった。今回参加することができて大変良かった。

・信頼性の高い調査デザインのアンケート結果を拝聴し、大変参考になりました。また、調査結果から、具体的な提言につなげていってほしいところが興味深かったです。久田先生のご解説も大変分かりやすかったです。

・性年齢での差がどれくらいあるのかについては知りたいと思いました。フランスでも同条件の調査ができれば、さらに興味深いと思います。

・パラリンピックの開催そのものだけで障害者理解や関心が深まる、という単純なものではないのだなと思いました。

・高い信頼性をもった障害者イメージの尺度を作成されたことに感嘆しました。私自身、大学生時代に尺度作成の研究を行ったこともあるのですが、尺度は社会学的研究における基礎研究だと思っております。東京パラリンピックに合わせて完成させられたことに敬意を表します。

・障害者を取り巻く4つの障壁のうち、意識上の障壁が一番高いと聞いて、継続的に社会全体で取り組まないと解決できない問題だと改めて認識した。

・精密な研究成果を出すために調査方法や結果の表示の仕方など、様々なところが工夫されていることを知った。私はアーチェリーとボッチャを観た。どちらも第一試合から決勝まで観たのだが、私のような人もこのアンケートでは関心が無いに配属されるのか。と質問の捉えかた、またその定義の難しさを感じた。障がい者の方が全員すごいわけではないという考え、偏見を持たれているような無力な存在ではなく、すごい存在なのだという考え、この二つを比べることに違和感を覚えた。

・4000人の追跡調査とのことで、信頼度の高い結果だとは思いますが、東京大会の観戦者数や、障がいに関する教育経験についての数値が相当低く、驚きました。東京大会前から「I'm Possible」などのパラ教育事業も始まっているので、今後も定期的に調査頂き、数値の変化を見れたら嬉しいです。

・非常に興味深い内容でした。ただ、シンポジウムの中で指摘があった通り、最近ではテレビを見ない方（特に若年層）も多いので、別の尺度が必要だったかもしれないと感じました。

成果報告からはまだまだ課題が残っていることを実感しました。時代とともに多様化する媒体はパラリンピックへの興味関心の一歩になり、オリンピック、パラリンピック教育の継続は共生社会を目指す中で深く繋がっていると思いました。

・障がい者スポーツに関する教育が、想像以上に普及しておらず、驚いた。パラアスリートに対して、特に日本では「困難を乗り越えた人々」「感動を与える存在」と捉えられていることに違和感を感じていた。そのように捉えられている要因の一つとして、施設環境のバリアフリーが進んでいないことが挙げられると私は考える。施設のバリアは心のバリアフリーで取り除けると聞か、障がいのある方は、施設のバリアがあることで周囲の助けが必要となるため「困っている人」「かわいそうな人」「助けるべき人」という印象がつくのではないかと。施設のバリアを無くすことで、本当の意味での心のバリアが無くなると考える。

## 第2部（シンポジウム）の感想

- ・三者三様の様々な考えに触れることができた。パラリンピックの在り方、共生社会の実現に向け考えていく中で参考にしたい。
- ・皆さんの考えの一致するところ、しないところ、論点が明確でとても興味深い討論でした。
- ・世間一般のパラリンピックへの関心度、障害者スポーツについての教育活動、障害者へのイメージ尺度などについて、多方面から様々なお話を伺うことができて、面白かったです。
- ・「障がい（者）」ということについて、法制度、スポーツ、教育など様々な観点があるということに改めて気づかされました。社会制度のマクロの取り組みと、実際の人と人との交流というミクロの取り組みの双方が車の両輪としてうまく噛み合うようにしていくことが必要のように思いました。また、本日全体を通じて、ハイフレックスでしたがオンライン参加でもすごく聞き取りやすく、とてもスムーズな運営で素晴らしかったです。
- ・私は仕事でオリパラほぼ全ての競技の中継を見ていましたが、身の回り的人達は全く中継を見ていませんでした。ですが、大日方さんの「観戦してなくても報道を見て知っている～」というようなご発言について、確かに私の両親も中継は一切見ていないものの、夜のニュース番組等を見て「村岡さんって女の子またメダル取ったんだってな～」というような話をしており、観戦はしてなくても関心はあるんだという事に気付きました。
- ・わかりやすかった。自分事として感じるためにはまずは学校教育からでしょうか。「合理的配慮」って本当に難しいです。研修を受けてもイメージが曖昧。
- ・様々なお立場の方の考えを聞かせていただき、私自身もはっとさせられる内容でした。パラリンピックのとらえ方が自分の中であいまいでしたが、今日うかがったお話をヒントにじっくり考え直してみたいと思います。
- ・研究者同士の議論ならば当たり前ではありますが、どこまでが確からしいことなのかに気を付けながら議論されていたところがよかったです。そのうえで、パラリンピックの影響はどのような媒体から受けるのかなど、肌感覚と第1部の結果とが一致しない点にも言及されていましたので、今後のさらなる研究結果を期待したいです。
- ・傷つけまいとする意識から、言葉の選び方が難しそうに感じた。そこから私も無意識のうちに障がい者のかたよりも優れているという意識があるのかもしれないと気付かされた。弟は小学校で体験したという話を聞いたことがあるが、私の学校では障がいスポーツや障がい者教育を受けたことがないので、深い関心を持った。自分事と捉えるのは難しいことだと思うが、当事者の方のお話をたくさん聞いて、共生社会について考えていきたいと思った。
- ・JPCでは従来より、「パラリンピックを観戦しただけでは共生社会は実現しない」と考えて、学校でのパラリンピック教育を通して進めています。「パラリンピック教育」とは、パラリンピックの競技や選手、歴史等を学ぶだけではなく、競技を見て感動していただいただけでよかった気になるということが危うい状況を生じさせるという側面があります。東京2020大会までは、気運醸成も大きな目的でしたが、大会後はどのように共生社会に結び付けていけるかを考えていく教育の意味がさらに深まります。パラリンピック教育が重要なのは、それが、パラリンピックの規則や用具の工夫についての考え方を、児童/生徒の周りの生活や社会の中の課題解決に活かしていく、そのための過程を学ぶという点においてです。障がいの社会モデルについてのお話もありましたが、合理的に配慮するというのはどういうことなのかのヒントをパラリンピックという一つの窓を通じて考えるというのがパラリンピック教育です。パラリンピックが共生社会の実現に関する問題をすべて解決できるというのは幻想です。スポーツの文脈の中で、共生社会実現のためのヒントや考え方を探ることが重要であると考えます。また、小倉さんがおつ

しゃったように、パラリンピック教育を受けた世代の児童/生徒がテレビというメディアで観戦したかどうかについては検証が必要だと思いますが、大会の開催は最初のきっかけですので、今後5年、10年、15年…というスパンで意識の変容をたどっていくことが必要と考えます。小倉さんのご意見は一つひとつ、共感しながら伺いました。

- ・シンポジウムに参加させて頂き、共生社会の形成を今一度考えた時、教育の場や社会で共生についての学びを深めることは、現代社会の大切なミッションだと思いました。
- ・多角的な意見でタメになった
- ・3名のシンポジストの方々の回答が大変勉強になりました。特に小倉理事長の、パラスポーツの裾野を広げる事業とエリートスポーツの発展がL字型になっているというお話は新しい観点で、今後のパラスポーツ支援事業の際に大変参考になると感じました。